

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40



源語悉草卷之四

目錄

柏木

鈴虫

汗法

白宦

竹川

推車

樓筆

夕夢

幻

紅梅

櫻姐

總角



サーサ

有馬の脅懼をきり残りで年もうすぐぬあやまち  
てと思ふ一筋のけいぬのせふあるひりもか 独小海ふ  
そくわまうねまぶれ そくまく一又女三のまの海たち  
りとあらわくおとが海の内にくまもとうじうおとべーとふ  
のくはく厚4石のことをよこり かみ海をすくせのねあらぬ  
おあまびとあと特もどとすうととひりびけて 姨  
タアガードレホウトモト親連おやぢミムヒキマサエ  
ひまと女二のまくまく残る今ハ取つたあう候とづ  
たと問セテクヌモ理ア能事と仰おほシテ後まづと書

柳家文集

今ハシテモモレニ烟をひきとされたる事無く力弱やあ  
小侍度女三ふ侍候せざりて今ハビタの如にて何事  
四ツ一セモ身をもととすかあひすみまわの女三のま  
えを身に附せばあつて、うなぎに口をもがくと烟くびと  
もくさを小侍候持來して松木ふ刃をも小ばらの  
四ツ一もはせの只ひおとれと松ひて又ア宋  
行拂あそびの烟とぬれどもあつひまより是に  
小侍候小侍候をゆどもまづゆまよんをりやし  
思やうつ。がくうびぐれに威勢すがるがれの若めひ  
女三の声をもつて御身だ。とくゆうきとてのくへた  
女三は言ふよう聲の口すにあつて怪しき聲をいふ  
ひもだもくわるを。又見有きむけちもううづの  
考る事おくみて御身だ。よろあごとあつうすのり  
かき一席公内内少もふうふ闇多す侍の宿主と  
御法始をきく一書物のひそひと曰くゆうほどふ  
若君生れ立てもあ志のうるがう涼の女をほきくよ  
まくねあかまぶ。ウ木本能解ともう解ひば。男も  
くふかきぬふ。ウ木本よく解かれて不審ふ思ひと



三

御、せやう、持、と、も、う、と、う、が、黒、ね、わ、い、あ、う、  
と、あ、う、バ、女、こ、そ、せ、し、め、か、ひ、き、う、す、  
五、十、日、  
幸、日、あ、と、う、く、れ、び、と、う、あ、う、タ、ま、方、ハ、め、日本、ハ、遺、言、  
お、き、べ、柏、木、の、か、か、え、お、あ、ま、み、の、多、を、か、け、い、ふ、一、束、ハ、  
カ、く、き、整、へ、が、序、母、ま、や、な、不、對、面、て、せ、ち、紫、カ、ま、の、あ、ざ、  
き、ま、す、ど、も、か、う、ま、タ、ま、も、柏、木、の、底、葉、ま、の、ゆ、す、を、た、の、  
志、生、じ、ゆ、ち、よ、げ、よ、り、く、と、を、序、終、して、大、き、り、の、大、序、  
す、ゆ、き、ぶ、く、ぬ、あ、ふ、白、い、く、と、す、柏、木、大、富、の、様、を、

はまの柳の芽みどりもあく  
まちうらのむらをなへ  
かきがさすとてやまと  
伊勢いせの父おやの事ことありま  
伊勢いせの父おやの事ことありま  
ゆきのゆきを晴はるの晴はるの晴はる  
ゆきのゆきを晴はるの晴はるの晴はる

まやのやにねまくらやまふるのふくらまき

卷一百一十五

松木樺太納言の子也  
悲しき事也あらん

涼もやうの時より西かよはふ一枝ぶけりまふとて。  
一周忌ふともゆくへまうす。あまがとほふ力内カタ小あて。  
あづまをまき奠カジギのをす。枝は大風ハシラのうちアキて。秋遙  
のいあす枝ひえす。山の東ヒ。女二のあ尾ハツみ城シマの後も。  
はづれもとすに付ても再々ササニゆみほりアシま拂寺ハラシのが  
ウカ林カミの生ハタチのあくま草タケ。一月タツのあふそほすアフス草辭タケ  
拂ハラシて送ハセすとて。朱蘿院

世セとめがれ入ハシルるわざハタツを用タクて。とおとしのよ  
序シかく女二のま

うな母ハナムの河カワぬヌうばやハタツと有ハサウ山游ヤマ。道ミコト

君君ヒカル這ハシルうて。比翼ヒツヨウをまちマチし。くひクヒかぐすく。清クモを處シテ  
せとづのく。うの君ヒカル也ハタツ。もつて。すとわくと  
やすに写ハシルて。涼

うなすも河カワさびれハタツ。是所ハタツのこハタツ枝ハサウ見ハサウめハサウす。  
文房ヒカル。柏木ハサウの小ハタツ。一束ハサウの落葉ハタツのまハタツと。まハタツ行ハシルひ。ま。  
秋ハタツのタのハタツ河カワ。あるく。夕暮ハタツ一束ハサウのまハタツと。  
まハタツが落葉ハタツの落ハサウ。まハタツ不對面ハタツ。落ハサウひ。もハタツの  
拂ハラシ。拂ハラシも。まハタツか。まハタツ。傍ハタツ小和琴ハタツのまハタツ成ハサウ。柏木ハサウ  
志ハタツ。拂ハラシ。おとと。あつ。か。か。じ。も。拂ハラシ。し。落葉ハタツの  
まハタツす。も。あ。く。が。葉ハタツのまハタツを。か。一。も。拂ハラシ。と。お。く。

うし。さすてにかひられて、秋の更始ノ一月もひぐまを。  
文書ゆきをす。いやしふ。笛を吹き出しあひて、柏木辰みとねば  
ゆくともあ。がれ露を見蓮生の中に。椎葉もおくゆきが  
みて、おもにまう旅びが一吹きしませぬ。また不  
あげと蕉の葉の古の秋ふかくぬ出の二事ふ  
ゆうくみゆき

佛子文選

様筋のとくづかひふうりぬをやくしもとつま  
あゆるえよへゆりかへ様子やうせきて。まかうとくづ  
一条のまくづき再びねりとよひふみす。唯ふんあじ  
下かほりてかずたまびしとふの方様章をあひて。情ふゆゆきを  
まあがくちぬくちよむ。文書の様子をうづけ。のる月す  
かくまもくもくづく。かゝゆき。あふくとせまくと  
あまとうかく。文書のりひきり。筋线をもと一條のまく

第廿二回

萬行日暮よも風かとからがまつよもとまほはくをひ  
うきよそめのよもとよせむねととソシ。ひつとすらとごと  
と  
同おなじととくふ。あたまとみそに年としをとるまき。孫ねわが  
祖おやと。注出しゆしゆす。序じゆをとふ。是されぬ。まほとく。ばくも。注  
りとす。かわもとをかくしてひく。まほとく。かくす。かくす。

おとをづかへ月あでまくとまうけすまに格子  
 明けちりゆへおのけづかとくほらと船もすくべ  
 満るねまのまの親みかくへばとひやうゆくまの  
 まふらえす。まうがたやうじゆけじん。まくとそく  
 けふえ入へどとおとづれとじゆげみとおま  
 えまか。古事記。まくまくよ長く。まくはくとあり  
 しらべぬすにやとねがつづく。六条院へまくすく  
 シテ妹。相姫の女清めまく。びきもく連あまびま。  
 女三介。高野の股のまくとまく。あきみとおまつぐと  
 まくと柏木小御みまく。おまがくの内小椎童  
 すもあまがくとおまくとおまくと。柏木の親達。まくと  
 まくとおまくとおまくと。おまくとおまくと。おまくと  
 犬邪稚也。まくとおまくと。おまくとおまくと。おまくと  
 おまくとおまくと。おまくとおまくと。おまくとおまくと  
 おまくとおまくと。おまくとおまくと。おまくとおまくと  
 おまくとおまくと。おまくとおまくと。おまくとおまくと

立達の元のとうかに、女三のまおも持佛堂の供養  
せきやうゆ、源氏の寺へひしてけり。黙多<sup>もびた</sup>義<sup>めい</sup>がり  
修<sup>しゆ</sup>り、入道女三がまの朝夕讀誦<sup>読よ</sup>。まほ清経<sup>せいきょう</sup>をば源氏  
自<sup>じ</sup>のせきり、道す師<sup>じ</sup>ありてひそむかまく法<sup>ほ</sup>を  
従<sup>つ</sup>う。かく尾<sup>び</sup>と成<sup>な</sup>り、後<sup>うしろ</sup>へ、ありくりてすりとあく  
あやまちも罪<sup>つみ</sup>もやうやく無地<sup>むぢ</sup>して、座<sup>すわ</sup>りともさげ、寝<sup>ね</sup>  
す。秋のはやく、どうまくとせび<sup>せ</sup>ふ細<sup>ほそ</sup>せりて、きづれ  
生<sup>な</sup>と教<sup>お</sup>せらべ、啼<sup>いたま</sup>とまくとせび<sup>せ</sup>ふ細<sup>ほそ</sup>せりて、お  
月を涼夏<sup>りょうか</sup>にて、落葉<sup>おちや</sup>。松虫<sup>まつむし</sup>も、うまくのうけ<sup>うけ</sup>と  
室<sup>むろ</sup>をま。松虫<sup>まつむし</sup>は、まなぶみで、まよひのかぎりを  
机<sup>いそ</sup>うまと、人<sup>ひと</sup>あげまぬで、ひきとけび。公<sup>くわ</sup>の隣<sup>隣</sup>の虫<sup>むし</sup>  
修<sup>しゆ</sup>むるのむかと、くづくづくと、こゑとくゆすにあまくと  
ゆくゆく虫<sup>むし</sup>あうとのうべ、入道女三がま

おもせんをだうと、もとて、とすすに、とすすに、とすすに、とすすに

### 序之六条院

あらうきてまのやうと、いとくも程程<sup>ほどほど</sup>虫の色<sup>いろ</sup>をうせぬ  
と、ほんぞおどろかざる、落葉<sup>おちや</sup>の、隣<sup>隣</sup>の虫<sup>むし</sup>。夕方の大将<sup>お</sup>  
まのか敵<sup>てき</sup>よ、人<sup>ひと</sup>をとまひつたが、深<sup>ふか</sup>く人<sup>ひと</sup>おもひて、四聲<sup>よんせい</sup>  
ども、じうぐに、かくあー、松虫<sup>まつむし</sup>のえむにて、あつめんと  
の修<sup>しゆ</sup>りて、序<sup>じゆ</sup>をとけたひざうめく小冷泉院より

序はあり序割

あがむとけよとすむ極ゆゑわせぬ秋のす日

序之十六奈院

月新の月一きるふまめ我やどづれ候をまきう  
く驚くやせりもくづけおどし。清らかび止みて  
多那御内み。あがむとすむのくちつまて。涼冷白泉院へ  
まうちが院の絶えけ收りせりひて。西の庵の。和圓の。  
ゆくにむらくゆくゆくゆく。あけびくふく  
ゆくゆくゆくゆく。あけびくふく  
あけびくふく

文

實

さうれうとくふいそれすまえうりおうね。柏木の小の方。  
ア柔の落葉の。落葉の。小うけて。人やかく柏木の遺言を  
きくと。宿人仰めて。下はかかれて。さやもます。  
月夕小うて。思ひまつ。うべ。どうぶい念は。小葉を。落葉の  
あがむと。落葉の。落葉の。おうけふはく。かひ。ひ。以處の林  
小野と。不不小家を。ねあひ。されば。まわくおりて。山小野  
大老練師と。清ト下。おせよ。あせよ。あせ。清東より始め。  
序の。すと。まで。文事を。入。え。も。ひ。ひ。

小船へわたりまよハ月中の十日候りかまど。高まの山見  
れまくうー。松づ傍の小山のきがくど。山あらかね。  
秋のうきがくど。おふ家ねうドと。紹うたうあ居う。  
あくまとも無とゆうてみあ。さてみやびくまう。  
そつねく小築垣もひてふす。ほまみ立す。西れを  
ちふるもみあと。あまう。じゆひ風の东うねくと。  
修法の壇金ぬせれふとせきう。せきうとみて寄の  
居まつまく。おなづけ。萬葉のむらまく。清薫の  
まくふえうとひまくと。あゆと内役。おひふく。内役  
あくに到の際のきまで。亨さもあちあて。づくし方と見えねば。  
ひぐーはうかんとてえだま

山里のあつまをそよう。亨さふまもあくと。あくで  
夕暮ゆふのち得とくはあよゆの。是名いみすり。萬葉のま  
山築さんくつの難むずとひそて。亨さふもあくと。あくめん  
夕暮ゆふひとあくと。あくと。萬葉のまふもあくと。小海こみまと。あく  
内うちと。萬葉のまと。あくと。萬葉のまふもあくと。小海こみまと。あく  
小の方かたの障さくと。あくと。萬葉のまふもあくと。あくと。萬葉のま  
まうと。萬葉のまふもあくと。あくと。萬葉のまふもあくと。あくと。萬葉のま  
万葉のまふもあくと。萬葉のまふもあくと。萬葉のま  
ひくと。萬葉のまふもあくと。萬葉のまふもあくと。萬葉のま

お年少の息のあらわしよりうへておまつを。律師候にて。  
大日如来堂の事ありて。何事かを出さんふゆで。猿  
がくしがどや猪はほりとばく。法事大典の間よりゆく  
意地小生すゆやとひよへば。口息不。故に萬門智の遺言  
にて。猪はをたゞしてかひ入猪ひす。あまらふ。のう  
のくをかうきぶとあくまくとくううべ。律師  
何事と問う。きどちのい猪ひす。ひはう。けせきへ  
まうゆふ。おち葉のまわなり。また西のはまやう。  
ひとう猪も。此男のあくまく。をほくと行べ。の猪も  
又お猪も。とまよの法師。がくと。文房の大御殿と  
おもやてぬづき。彦葉のまわらぬく。とまよを重  
もあくまく。お息不。おうこ。家政を。お。知事。お  
おもけたまぐ。人すふ坐てある。だ。おもけ。おも  
け。と。彦葉。の事い。おもむ。じ法師。おもむ。大御殿。おも  
おもく。おもと。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おも  
おじゆ。おもと。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おも  
おもむ。おもと。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おもむ。おも

卷

ج

卷之三

知之す。律師捨て教かと立ちどりしる。落葉のまゝ。  
後きよと涼すて教をさうと立だて。そつとすあち  
す。六条院よりとも山の帝よりもがまひひとをげし。  
口息不の甥の大和守まのゆとを病ひひまざ、病とまよ  
まうタ秀もわたりたひて、とみはふのえど。落葉のまやも。  
せん身。口息不のひまちまう。の城をとらせば。娘一  
うて、死んだもあらじべ。只今へあむねくえあひば。あまくと  
因に捨てたまへんあぐくくいふ。落葉の口息不の迷云ふ。  
はあすのまは口後見成新とひひかて。家只人  
のふすましと口く。九月十日終り落葉小枝へかう  
ま。山風ふきぬあくの梢。巣の葛葉をひたゞめ  
ち。鹿々たゞ難のをふく。山田のをふも尋ねうず。  
き巣を箱の中に交すと。うちのもくら(白也)例の少將  
の君石か。彦奈の口怪体ともる。がの口息不よりれ  
きをおうひ出で。もはやあくら(白也)の少將  
の年月のくるまほのあくら(白也)。かくあくづかゆす。ま  
めひと跡をさす。ともとすまざ小神くぬけ。夕暮のゆりま  
ゆく。もとを。かづこをねむねむ。かづく。今く跡を  
やうく。うづく。落葉をあどがきやまゆふとをす。あむ

難面もあくをかわすとづぶやきす。座もすと坐のまへ。  
今とよは道ふとおもひそ。ややほくらひふ。くらひ  
まぐすとゆを引ひか。是はごの方別のまをみへり  
まじむがきす。ちぎりあてらそひめ。ともかくもはじめ  
にもあびとうげみて。歌ときく。文書へ。が息本のむ忘りて  
ぬま。先もまの一条のまへかくもと。一条と跡除が  
せを勞る用意をあき。羨望のあぐわうて。小體の往  
きしと思ひどあゆふとほせば。汽車よせてくくにあ  
まねが汽くすをきよ。息不の。水列車。水經の箱を  
汽車に入ふ。停車ある處四後じて。居室

水仙集

序文

人言其子之賢也



そぞれすづきにはあらねだ。あらそべてのせぬをあらと  
あらすづきのまゝにあらうにあらうにあらうにふかがみにひそへる  
あらぶ。中宮をおほす。あまの中に娘をと二のまときて。  
育つてばに二文を。アラモトてあらんのひよしゆくはく。三の  
宮と山まふをまきて。なまくあらぬうら。ばらふおもく  
まきて。墓のまゝある樹を桜を。花のわらひをもくして。そそ  
あらしき。あらぐわらひ。佛をまうきとのま。ば三の  
あと白の兵部卿とくよくわらひ。白木は三重院の往  
詔の地。船ふねて。せの中原へくぬけた。せのちもひそむる  
どうう。さやうおきど。おきとすきだ礼をす。中ま肉(ま)り  
あらすじ。山川の小室のとみ四方をほりえりだ。種のかせを  
あらきとくど。かくとくとほりえりく。お裁えぎ見るを。根見ねみ  
来居くわいするを。涼山後ごて。ばにまくみて。こくちとめく見み  
みや。おて舌したと嫁よめ。ばくはまえま。出でとまと月つきを  
あつまうあきだ。紫むらさきのく

主とみるはとぞのゆかたまはまに風かぜきく森のよき  
よみ

やとせざづきと争あらそつあせふれふとく強つよい  
と争あらそつあらふ。山風さんふすゞすずとめぐる。あらはら。かくそ  
そ年ととよ。わざとゆとゆとゆとゆ。せんねすゆねま。すゞすゞく

そし。すのゆをき。みだりを候。とくまう候とひん帳  
引手せし。さくさくとまはぬ。ちよとしのそげれくにえふべ  
中まほきとまへて。おうゆふ。拂りぬのむらで拂りた  
忍え多び。修法の内使。立候。おのけの口と氣の事。  
あく。めうす事とせしと。ひあくとせまくはづふまえ  
そそ修ひねむ。のまへて。まくひづるやうむおがざれす。  
雅もくられまどひきす。涼のおり。お御く。そそおれづる。  
夕暮ふのきひあり。傍石入て。ゆぐ。坐うとせまく。まく  
むく。壁ふの春ふ。よるか。四重新わざれがまく。馬あま  
ゆく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。  
新ふをとまく。帳内。帷子を引ひげて。又まく。腰。却く。とまく  
うく。うく。引ひげ。とまく。とまく。給ひ。とまく。現  
よまく。まく。ひあく。とまく。とまく。拂葉邊の内使の女房注  
まく。ひて。車より。拂葉。ねぐ。とまく。とまく。拂葉。とまく。  
ゆでゆで。せき。首葉。のとまく。とまく。わの腰。とまく。とまく。  
ゆでゆで。をね。とまく。とまく。腰。とまく。とまく。腰。とまく。  
とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。  
葉邊。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。  
とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。  
とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。

かく絶えむことねだして、念へ終ひを猶うほき。かく  
すふ。お事もゆづふらうもつて、がくやもかく出候まだ酒を  
よちがふ歎かきあせりま。おれのふきに酒さけをくよはす  
べし。浦うらで理りぞめと見て、源みなおれをとおがへば  
くまほの教おきうちを始て、よりうすゞきをひかげて、  
じ記きすも致たまぬ四よ方がたす。きみをせの原はらを思ひもすやん。  
佛ぶつのすめきるをとぞばく餘あまくして、ゞぐ、ざくらりと  
ゑ、ひすれゆきを、波なみうるが、むなきんのいを  
にて、仏の道みちをばくやう。ばくよーのあふあくと  
佛ぶつを念ねんし候まう。我わはの大慈だいし愛あいの上うの心こころをばくと  
おぎだ首くびと身みとて、彼かれの大吉

附つき之一六衆院

古いきの歎かき今いまかきて、ねきふ被うぶて、病びやくを重か  
申あすども、わくまく方かたくきひ坐すわく  
まあひくとも、あくまくの年としのやうに

## 五月

深ふかの紫むらさきのよみがえりをひかへる年としは、暮ぐれのきをとひます  
ひけても、くまゆくひあくやうにのみゆかかづともせ  
まあひくとも、あくまくの年としのやうに

まうとど。ゆきち。暖まく。ゆくと。声野有。こち。声の  
云那郎の宿。やあり。みづ。床

序  
一、兵部卿のま

序文の終りに、山中あらかとせりひとせを身をす。序文  
のちある達ふと對面する所。ふるりんはども思ひ  
おづじげりどば日はふねいばれびがくすりてまの  
せのくみたははせわらもうそめぐれ。思ひは是を  
かゆもまきりとしやくも。向へてはおまじとてかくへく  
やせ。思ひやまと目ふるるとふとぬくはまきものせとが  
せ。丈高にさく山簾を擣て対面へよび孫の三のまを山簾  
みくま。前からさだ花の本とてはすうふ時をわざわざ匂ひ  
みちたまふ三のま。まろうが様をほふう。ひきくくらぬ  
やうに。本のまことに帳をみて。帷ふとおう。がく風も  
吹よう。とおゆがおう。ひきくくらぬう」とのよ。  
ごくもの被。求  
おゆく古きふれをかげくとくふ。ひきくくらぬ  
風ふちへとくとくのむか。被ひとくとく。木のまきく花を  
几帳をさうとのま。三のまが。さうとくとく。おまき  
女三のま。わづるふくらむ。お佛堂の四方へふれりく。ほの深き  
四角へとくとく。ひきくくらぬう。まくとく。まく  
人をあきらめ。紫の山のうち。森の山。おとすとく。おとす  
あらこう。おつまふは生とおう。が。女三のま。谷みまもと

まことにすよつけとせと案のとて、せやうおとくとぞきに  
よくまきゆきりと。ちとまきりうらひゆす。さくみ、せあま  
せあまをよそおきびせてくともおのむかすと。や  
うとまくと女三とくより尼ふねうたせふまうあらぬへ。  
わくわくもあると。身成早下みのきど。涼の今然秋秋み。  
あてものやうあまが。涼山耳ふあうて。案のうともく  
おるきと連りまくす。それよう。眼石の山もくわすくあひて。  
序うじと成立すもく。あくまくおと。立つとまくのミ  
まくはまくと。おぐまめく。中将の君と女房の案の上  
おさかまくと。おぐまくと。おふざくみ等たれ。序うじ  
とまくと。おぐまくと。おぐまくと。おぐまくと。おぐまくと。  
五月西ふひとおぐまくと。おぐまくと。十日後うの月  
おたるまくの月。一月ふた月おれ。十一月の月。一  
年。四つまくと。延年修法す。ひつやうに男石あどる  
彦。ぐ案のとくかく。まく。極樂のゆくあらとまく。供養  
せあとせまくつけてと。悲しきものあいがく。城主。ばく  
す。おれす。とくとくまく。あらねふまたまく。時鳥のあらかふ  
なげだ。源

おとくとまく。おとくと。おとくと。おとくと。おとくと。  
黒とひらく。とかく。とく。とく。とく。とく。とく。

卷之三

ほくへぬるすよ。おぐれーぬるよ。おやまよ。おうごんが  
おぼえぬ。ひとつですよ。おぼえぬ。おうごんが

やうのうふのうへきよまみえひがのうひのうふへきよまみえひがのう

君の扇子

と書ちけりを訳して原

九月九日少人。御批九月九日事。毛氏注。

諸事小部手三事の私事也云々社小門神乃な  
事ありまつり禁中は人跡を焉ふ小除九日にはとる事

才子也。大風の音を以てやうやくおまへなう  
きるやうに鷹の翔と。やまと風の音を

也。子育ての事は、おまかせ。おまかせ。おまかせ。

つりて引出でをす。彼須磨の内やうきのま。紫のとよみあせ

東文山の事は、此處に書かれてゐる所と  
大體同じである。

が家かをせのゆきにとどくやとすかうよとおせど  
ひなづておまくふそ枝をす。ちくのゆうそく(あくと)の  
書く事など見え。あすぬふゆてゆきし。おもと  
足あぬまでゆりみる。水茎ぐきあざれを。ゆま  
ようとくのゆきづく。ゆきつねのゆきとよとよたま  
うぐりとて。涼

おのづかみをもぬをよそひまへ  
うちまへゆきかくいふくへ

ゆきの山にて又くまも野ヤマノイロを嘗て其の味に小郷コウノシタとぞ

禁中からみへれどもて師走の法事ゆゑ元日のすまとう  
とくとくあそびと遊んでおもひこんでゐるがゆうでやもく  
引出

事年二三也。伏奏と白書の毫の間は八九年也。以降丁  
まきをさをすゝく。朱雀院。伏社大臣。攝政太政大臣。義  
兵部卿。伏宗の下り御父式部卿の事もよどむ。

源の先が通ひ後方らば三つともござる。あとの  
一門内中にす。さうども源の三つも、女房の衣服  
をそそり源の門子よりは、がちもあらずおど。  
源のなからばせふ多びけり。くまも。かく張り  
てん。三の主を多那郷の主とし。やうの門あは紫のうの  
門院よりゆき。二条院ふおりゆきと紫の上りけるみも源  
令也。文季。今の大臣也。六条院へ。一条ふとせ。薦禁の主と  
御す。源の内からへ。おちる里の始め経り二条院の  
東の度りす。門石の傍孫の家へ後見てて。今主のとく。  
六条院は。まき。蓋の下を。源は。泉院。やま金多。が。院を。お  
ゆう。づきと。根を。まち。ある。やまと。に。づく。と。獨  
言ふ。る。身

おもてのうでにわい。ちのびまわすとば白ひふかれあひをど  
みがくらはせざきあふ。お祭神のまよばるゆきとくらやま  
づりあひて、こうくわき事は集あつめゆめゆくべ。をまつねふド  
ひ自ひ也見みよ。世のへん是これかふ。がほく中ね。みくま祭神の  
まよゆきてえぐでく。めきよこや

### 紅梅

そは接あづちたふ大納おおな云とふ。柏木のそゝ次の東。無サ野とソレし  
ふ也。左妻さきめのがまよ。盛裏さかりの序娘枝枝しおの君くみとくらも。  
余の序キ葉多新郎しんろうのまわかのまゆあ。序じょひまくらも  
ゆうけ経くわく。うづけふまきりて。娘君むすめくみを引具ひきぐ。み接素  
大納おおな云のむかすふぬます。大納おおな云の内娘うちむすめをくにこみ。あ  
齒股くいみのまくらつて歩あるき。序じょ君くみを春宮しゅんぐうの女め御ごお  
か。小のうのほは日暮ひぐれの娘君むすめくみを春宮しゅんぐうの序牙じゆがくと。  
大納おおな云ふぞ。おくまくけふとくもくとくもくとくもく。氏娘君うじむすめくみ  
の娘むすめの娘むすめの名な稱めい墨すみあり。おそくうを枝えだをわてみくら  
ま新郎しんろうのまくら。大納おおな云

かくしてゆのふ身みと人ひと園いんの梅うめふ生なままわらびやゆまぐま  
白しらまくら。まくらあくとおうじとめでまくら。ぬく  
花はなのまくらをうきねばとあらゆのほをすゞくら

おとえんぼうり一とくと。様へゆかみへあらび。様か好を  
つくおりまやぶ。大納言もがくとまをあら

### 竹川

聲の太政大臣の源の田始の玉音の内侍を小の方おおせ  
まし。その後年男三人女三人出をさす。姫君達と。女侍ふ  
まくせんと。ぐくまくは聲の聲の年をば入内と洋のあ  
テの聲の聲。うりへ。うとう川ノ川紀をもあひて。冷泉院  
うえを。帝よりも。事御ふよ。よとの内す。也。しり。御母  
玉音。次第御階へ。まのまづ。ごおと。聲のね。す。小  
駄て。お邊せ。まかうに。比姫院を。冷泉院。まもと玉音  
多く。父の大臣。ひに三男。院人少将。ひに比姫君と。かづ。  
あまく。候て。多かど。うり。う。ば。院人の。おね。母方。お  
姫君。と。と。同。也。姫君の。清。才。少。は。庭。と。子。を。か。ひ。比。事  
そのやうに。と。せ。も。す。か。う。中。わ。も。比。玉。う。と。兄。才。お。れ  
う。と。か。だ。が。か。よ。ひ。つ。姫君達の。よ。と。と。せ。唯。か。あ。ば。只。ひ  
か。と。か。だ。え。室。ある。君。お。き。が。ま。ふ。出。て。院。す。福。み。か。い。ば。  
冒。に。経。後。の。君。の。お。や。へ。花。人の。か。ね。茎。中。わ。ね。お。り。こ。琴  
など。強。も。竹。川。と。う。た。ひ。ね。ひ。き。木。林。の。巻。小。あ。る。ん。が。と  
竹。川。と。う。た。ひ。櫻。馬。樂。と。い。じ。て。秋。代。の。う。ひ。ま。の。世。是。じ。

御小限ウツミ。徳昌をみて。ばー川。伊勢の海。さき様サキマサニ。がひひそ  
數カウあり。今れせのうちへ也。葉ゆて叶ふは後アヒタシのりと  
行川ヨコイワのシカホー一姫ヒメ。ふくらみの處アヒタシの處アヒタシをもと

序シテ。侍従の君

木川キワカワをぬるヌルとひきヒキ。もひかヒカと思ひヒシ。而  
は姫君達ヒメノミツタチの御室ミヤムロの邊マツコ。木立キリの下シモに様マサニ。は君達  
をもとアヒタシ。木立キリの下シモに様マサニ。をぐるグル。あひす。序父母シユフム。も  
姉君ヒメノミツタチの様マサニ。とアヒタシ。母玉苔ヒタチタケ。妹シマツタチの夫ヒト。夫ヒトとアヒタシ  
夫ヒトとアヒタシ。夫ヒトの夫ヒト。も様マサニ。をかけカケ。おにオニ。と。姫君ヒメノミツタチ  
其ヒとアヒタシ。を。若カワカ。の。サねサネ。の。夫ヒト。と。ばく。と。思シム。が。娘ヒガタ  
の。夫ヒト。序父母シユフム。の。よ。序父母シユフム。夫ヒト。を。馳ハシ。まの。夫ヒト。を。ひ。も。之シテ  
して。姫ヒメ。ふ。も。の。ん。と。玉苔ヒタチタケ。の。あ。い。ど。舞ヒガタ。の。た。ぐ。く。す。  
川カワの。う。と。ま。ド。く。山サン。む。し。け。を。る。す。が。禁ヒミツ。止ヒミツ。御ミツ。す。入ミツ。禁ヒミツ。  
墨苔モクタケ。と。文房モンブ。の。小。方ヒラ。と。の。と。も。也。終シテ。ふ。四月ヨリ。あ。の。君ヒト。  
冷泉院ヨウセンイエン。へ。ま。う。を。見ミ。す。帝ヒタチタケ。の。あ。の。セ。を。も。と。お。遣ハシマツ。す。が。四月ヨリ。  
お。ま。は。小。山ヒラ。と。ア。姫君ヒメノミツタチ。冷泉院ヨウセンイエン。へ。ま。う。を。見ミ。す。が。ふ  
か。が。か。と。ア。が。ち。に。か。く。一。姫ヒメ。の。夫ヒト。序父母シユフム。を。寝ハシマツ。す。  
お。ま。は。小。山ヒラ。と。ア。秋ヒナ。中ヒナ。と。ア。弘ヒロ。徳トク。殿タケシマ。を。ま。ゆ。く。す。  
お。ま。は。小。山ヒラ。と。ア。秋ヒナ。中ヒナ。と。ア。弘ヒロ。徳トク。殿タケシマ。を。ま。ゆ。く。す。  
お。ま。は。小。山ヒラ。と。ア。秋ヒナ。中ヒナ。と。ア。弘ヒロ。徳トク。殿タケシマ。を。ま。ゆ。く。す。

う事が出来。竹に吹き水附へます。若人の小樽、かひるを。  
齊にまぐらをもみのせ。今を、二人のふく。官佐もまく。おどろく  
國の御事。やくめやじくとおもせしものとと怖ひ立す。

卷之三

至り世ふづきまづれありぬゆるまわく。是の廻事の事は  
バのまじて、源氏の序章也。次に泉院の室へ源氏の序子とすと。  
兄オ

弘徽殿  
まへこ

源氏を始めての音を傳へよせばやうに思ひあつた

ありまふが紀行経居ありとゆきと草うのうちを  
まゐ  
浮世の物あはて又すくしゆのあやまつてあきらめに

驚かれて、今もまだ今日の事をも省くと、おおぞら姫君達を  
おけ、おどりの方をすきが、声をあがめたりして、おおぞら持佛の

中  
文  
君

集  
中

口をもぐらん。ナエ父帝。ナエ母女清みをもやくおくるあひて。ウリ。カミモ  
ハ後日もあけまが才ある。どほもえまくひあひだ。ナエ。せ、成  
わる。知づひよども。ナエ。セナリ。とつ。ナエ。  
五本大指。あらう。女。の。や。に。お。り。ま。せ。バ。ナエ。母。子。の。祖。父。大。尼。乃。  
序譜。ナエ。金。銀。珠。玉。長。短。大。小。ナエ。道。具。など。ゲ。ラ。キ。モ。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。  
ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。  
ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。  
ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。  
ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。ナ。シ。ム。

佛經否かと云ひてたゞひまつて御法事の事も阿闍梨  
住けま。オホヒ賢くそ。ねがえも教めひど。わやけふも出づるだ  
義り居て。うちの人の家の法文を讀む事ひたゞ。もとが里で  
考ふもあり。ゆきを説かすをもれば。公道うきの蓮のよふ  
おゆ。渴かきはれゆもひまねづま。比那君達在と云うしろ  
あくやふ。うそ河ちかど。隔かく河をす。阿闍梨。冷泉院にも  
佛經がどうへまつらず。さうかのまの佛法。小  
ゆくわゆはゆりて。さうかのまの部す。あらねば俗  
雲がくへやむ。優婆塞のまと。ソス是。薑半ね。家小  
ま。阿闍梨のお説を。そとより下を小石に。まだ耳  
きゆて。必ずて。おちひゆ。あと。阿闍梨を。まのと。肉通  
おす。阿闍梨ハ。のま。薑の。御目。ふく。を。まとの。ゆ  
ゆ。おこ。おこ。おけ。おなど。通ひ。之後。か。ゆ。ゆ。を。ま。通  
ト。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。  
知と。ゆき。ごと。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。  
経部。経部。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。おこ。  
下。の。私。の。高。弟。子。と。り。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。  
お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。  
お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。お。こ。

歌ぬ秋のあはれのまゝに季節あるてちゆうすく念れと阿闍梨の  
寺かで七日経ひてまづバのものひめやも有るの日あつて  
さりやほどみゆきうちて、まきをかづかすま近くおもつた。  
まの林陰にまゐれん。さればうがうきの琴のゆゑと不登  
ちとましとぞとて。おへつとまなまだ。毎ちかのとみこ生て  
ハのまの清らんと娘君達(ひづり)よもとひよとせむと清  
狂ひとやめたり。まぐれりそひせひとゆめせよ。家のもの  
人のやうにねまのまづ。又もまくあべのものがせよと念はふ  
やうひきぶ。わざひて。作の世にあたまを。をうて。おぞ  
いせをまじへります。八月のおもとくとをあがめ。簾を  
捲あげてくくるたう。ち君と荷の居間にて。壁色とまづふ。  
捲を。ままたう。子に。あきよ。まづふくの。縁ふけく  
さくひぬり。扇あつて。拂ふて。月の拾ひの。おとひて。  
ゆの。まづふくと。うりく。うりく。すれ君の琴。おとふ  
相を。まづふくと。月を。うりく。うりく。月と。まづふくと。おと  
月の。まづふくと。おとふくと。月を。うりく。うりく。月と。まづふくと。  
おとふくと。おとふくと。月を。うりく。うりく。月と。まづふくと。  
おとふくと。おとふくと。月を。うりく。うりく。月と。まづふくと。

卷あげてくるをうたふ居間にて深色とまつぶす  
扇をすまひすらうへてあきよ雪かねの月の縁ふけく  
さくひぬまひだ扇あつては扇ふてとも月のねうみのめうとひそ  
けのまじるまじる歌とまじるうりうりすれ君の琴よふ  
扇をかまひて八月をかんばぢいとせり月をまみくよながね  
すとのまことお多ひまきぬ是もふとまきひやうに歌す大君  
月のまくとおよどむとおまづくとせりうきくわがまと  
ちづれまくとおとすひまくとせりうきくわがまと  
あり。扇を是も月ふとまふとおうとおうの隠月の  
扇を納めてまわを。ソレがゆきとくわがわすと  
隠月

やうやく流の川をかわす  
ハのま河間梨木でりひよ今ひの日数りそけら海をかぎて  
おまえさへがまくおま對面もさしてはひきまつたの

支

三

ユラウちの生をすむ代書て

（三十九）

食うべまわるまよとくまきれぬ若ねふす。私のあひすゑ  
書かへたまやにときて、往後の方と上書にあつてことふ  
虫のすみかすて。がびくもにあづ。何とのまえだ。今ま  
あらんにもむくねば、落ちるをまくめが、りつに取らぬ。  
つんと斧止ふとくいき

椎うどゆ

白のまよと源氏の御孫也。うゆるい家と板木の子卯りで。うぐふ  
（伯父）  
（姫）  
源のあよあれば、白のまよとおぢとせ。がくの留母女三と白の

御父帝の御まよか。御母也。母子につつて、せきとせ。殊外

罕うて所事もほくとあひのバのまの始君達の子を譲り

あす。かとよふとよまのまくおほきびがくふひてといひは。

竹下もとて、ソヒより立とすめを、白をも字はくお。

またく思せど、あがく新くちくひあり。一経かず成ざ。

なれば、初歎ふと新あきり。年はもむほてとくかくと。

宇治日中やどうせま紫あらんたれ。二月廿日の御年

初歎ふと新。公卿殿上人あま。御詔也。公もうのう廢も

おりまし。御伯父文房の大臣の御行の、宇治のわるいとこも

あり。がそにて四地をとあり。かつて御琴をしてひまびき

弟のちちむとんばのまつもとくまくわれんばのまよをかほり  
津多あり

山せきふあゆぬくちうらのあひを陽て見る遙の白波  
ゆきのあけうきあすりがひだばくしわきせんそを  
うかるふかもとて・白よま

さちこちおけみ宿の湯川タカハ  
の湯川タカハのまくまくでかす・白よくまくうるはるはるあね  
自由れど・うゆて・面々き花の枝小付絶びて・娘君ヒナヒ  
津多ほづきあ

山篠白・あすにひよせて団扇タニシマをわてげふゆ  
けく・せえみくねがなれど・やまわくの仮初タラタマと深の  
まにゑあくへゆうてす・たねおとたぐ何をあくせえとく  
竹中タケノミの君ヒトせてもる

かざりきる君ヒトのたすくに山篠のせよともぬまのたびく  
白の山タカハ・母大納戸マダラなどまうす・ふちくべゆき絶  
ハのあよ・まのつり・ゆくちくがみ・娘君連ねびとくのひ  
きまたにびづきとくとく・ゆく・がー・わにとくえび  
かくとねく・まんとくとく・かいあつまーものとみくす  
大君ヒロヒト・オの君ヒトせうふぬえす・ばのまハ今年ハねりつ  
きづき・年也・おひがく・ゆく・およう津多ひたゆく

せまう身をすくねるひを秋中納云ふ成す。すてかへやつと終(ご)  
八のまをすくねるふ收ひあひ。かばんにあつた里とせえ  
きひそ。かくしゆゑも。娘君又控(まづ)ひそひそ。是れはうち  
きくがどちのまくべ。かとせをせざ。としけりやまを。娘(ま  
よ)て。佛茶(ぼくぢゃ)入(い)ゆ。八のま

象(ぞう)そ家(いえ)の店(みせ)へほりゆみばへとひ留(とど)めりよ

序(じょ)一。かわる中納云

ひの御(みやこ)せみ。桔(き)やしもと。のちだの弦(こと)ひの店(い  
やう)る。娘君(むぎゅう)達(たつ)のむり。海(うみ)すすく。年(とし)のちひて。無(む)経(きょう)て。お禮(れい)  
え。柏木(はくぎ)の下(した)うて。み代(みしろ)はく。ようむ川(かわ)まくらうて。  
念(ねん)はすうすう。じきよたのまくと。人の橋(はし)はた。むきて。るりて。お  
露(あらわ)し。ゆく。室(むろ)ふたのそく。け。おとひだ。娘君(むぎゅう)達(たつ)の  
もと。おとひだ。序(じょ)簾(れん)び。お對(たい)面(めん)。おせき。お方(かた)。かくら  
桔(き)の巻(まき)ふ。琵(び)琶(ば)。と。おとひ。おとひ。と。歌(うた)て。おとひ。後(の)

道(みち)を。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。歌(うた)て。おとひ。後(の)

おとひ。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。歌(うた)て。おとひ。後(の)

人のおとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。歌(うた)て。おとひ。後(の)

成(な)まし。ばのま。ひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。おとひ。と。歌(うた)て。おとひ。後(の)

ゆ。おとひ。と。おとひ。と。娘君(むぎゅう)達(たつ)の。すく。と。おとひ。と。おとひ。と。

と。おとひ。と。おとひ。と。娘君(むぎゅう)達(たつ)の。すく。と。おとひ。と。おとひ。と。

と。おとひ。と。おとひ。と。娘君(むぎゅう)達(たつ)の。すく。と。おとひ。と。おとひ。と。

卷之二

時人云可謂之有道者也。余嘗謂之曰：「君之文章，如火如荼，光芒萬丈，豈不快哉！」

内閣文庫  
新編著者別  
年表

まことに。年は西宮の御子の仕事

にて。やく取らに足音をもたらす。おはな  
まくら。まくら。まくら。まくら。まくら。  
まくら。まくら。まくら。まくら。まくら。

おもづけてあるとゆきあはる。いつかやへくを  
うけし。

ゆうゆうの内ふん。かくしてハテナリ。まつまご。中は君をひきよ

あり。姉君をどうぞありのみと思へ。女の心事はいづれもよき事

アラム語の文書

をくわうせんじて、おもて入るまじかに有村の事とゆゑをきく。

おれの手がどきどきする。おれの手が震えて止まらない。

御内閣也と云ふ事  
御内閣也と云ふ事

卷之三

吾は汝の心力様をよんでおもひぬが  
とてねが

かくして、うなづかば、うなづか

はまくらがぬくにしよくく山川のまくらがぬくにまくらがやかく

おもひあづばのまわ  
うつてゐるよしにじよ  
うべにゆきかく

おれの妻の方へ向ひておまかせ。ちまのまつまうて、私がうそを考の  
原

かくはいふにあつまひのゆゑをわざとたれが

はせをそひ、ばほもとてとまつてとよひ出でがゆ

えよしん陰かげとおのづかびひとすたかよめにみるゆ

とてゆつまは、白のくわらくわらとまじたかよめにみるゆ  
稀まれくおもふ、かねにんぐあるゆゆと、かよ角くの�につけて  
うねりとゆきまよ、乗りてよしよやくにあいだすだすと、が、  
あくねりひあくねり、後見ごみめうよみておいて、く好みこみすくわ  
せんに、かうあうぞちせんとまえまぶ、白よもかくわ

おもかべー

ゆざまた

空居の狼おおかみの達たちはひよし、れ、氣きせありあひ、川風かわかぜを、  
はれはれをあかあかす。まて、ハのまの序じ一國こく志しの序じ、まよひを  
せきうめせきうめ、山さんの阿周利あしゅうり、うゆううゆうの、ゆと、まわて、まもまもを入いま。

続

序じ吊つるけ、うゆううゆうが成なあげ、卷まき、始はじ君くわ達たちの、猿さるへ、まようまようて、まよう

司つかひ、うゆううゆうを、九帳くわうの、すと、かげ、ふくらふくらひて、うかぶ

と、かくして、ゆくせきゆくせき、が、お君くわ

ぬまぬまを、ひ、ぞうぞうと、深ふかの、玉たまむすめむすめに、まつた、まつた、と、ゆく、ゆく、  
ゆく、ゆく、と、ひ、ハの、まよは、ゆく、ゆくの、ゆと、まよ、まよ、まよ、まよ、  
まよ、まよ、と、ひ、白しらの、まよの、ゆか、ゆか、ゆか、ゆか、

1

一四〇

恨みをすともうまく叶ひだ。中ちかをはまるとゆきに不<sup>セ</sup>能<sup>セ</sup>  
さんとの事だ。白えとだ。あらぬ口をせぬひてかねば。口之  
まの後初にもむすりよるべ。うむふ中ちかをまくせ。大君の中ちかの  
取よがて。後身すておのへゆたまにの口をもぐつる。声さら  
りとおきだ。同一口すをもどねまへる引さるれが。おもへ  
らひて。序對面のせふ。母ひがく娘ゆくを強迫せす。すが  
つる声をば年比が流。寧まきておひきよ。おがほふ  
やうへぬ。せうよおうてばまことつやがまほどにもけん  
あらふあみのくわもあらぬ。わくくうけくわくおまほぶ。いそで  
ぬそとゆく。かくよもわやあ。まちてつまくおま  
よおちの絶法をひだるくわねど。わざくまう等て。ひそ  
をひし。妹の中君と公ざくまよ。うる合意。終ひ。  
内内のくわ無残始めかうくわ大君。かくよ中君と思へば。何かと  
のまちにて。合意志あらず。たゞ井て入をしと命を含せ。そ  
れもかうと姫君の姉をもすく入を。大君人の命を含せて。そ  
れを行ひも。かくよが男のちす。代。おな里とおせ  
中ちかをばおして。皆とおきて、かくよをす。かくよの姉がふと  
我よかざのあふ。よ成のあひ。まかをまづ。ドモて。もと  
かくよがえと。かくよ。おなり。中君よちがふと

つる小妹の君あさひだ。只ひのかたなる如竹て。出ぬとわくを  
而して。船すとむとけまへふるひきす。うへば中也君のおつ  
まんをとふ。事よきすがひきりんす。ある浦。けりだ。多く中也を  
ゆく。せんとゆてゆきをひてスのタ。白雲をそよがへ。ひる  
所車にて。す活へれど。白雲。城ぐはづく。立。うらふぞう  
のゆひて。無残古て。おれの老ぬがとく。そじけ。そまえ。へ大空  
ゆと。やうゆきだ。さくら。こもれ。うきふねと。ふと。かまう  
思ひ。無名引まきだ。白城入。まを。大君の義みも。うきうす  
ゆうる對面せんと。のゆ。常。せやうに。うれ。せ。が。も。あ。だ。對面  
おき。ゆ。白。ゆ。ま。の。ゆ。き。が。く。船。ま。ま。ゆ。し。書。同。車。志。そ。往。  
来。を。お。よ。て。中。お。な。あ。い。せ。を。ま。け。今。い。船。か。ま。ま。て。あ。る  
が。ま。ん。ま。に。う。り。き。と。の。ま。ま。浦。ま。う。が。ま。ま。あ。が。う。て。船。を  
ひ。ま。き。う。づ。う。も。に。ま。び。め。り。あ。ま。づ。う。う。も。と。う。き。と。  
只。ま。ふ。が。ま。ん。か。く。御。ま。う。う。と。と。う。船。の。陸。い。旅。と。難。面。で  
ゆ。り。ば。ゆ。か。ふ。

おまげや。あやう。す。て。ほ。く。と。ま。ま。ゆ。ね。あ。け。ぐ。の。る  
大君

か。く。ふ。書。人。を。と。ひ。や。ま。く。と。ま。く。ね。と。ふ。浦。ど。と。  
自。と。同。車。に。て。ゆ。き。す。ま。ね。と。ふ。浦。ま。ち。ま。浦。と  
自。ま。あ。と。あ。と。せ。ま。す。す。を。ま。ま。ゆ。と。あ。ね。と。今。い。す。と。ま。く。

( 3 )

卷之三

中にも立アド。おどり御へで坐さんと多く従事。大君令旨  
立アド。ゾトモの御事。西宮は傳ひて。従ふへば御身とあげし  
名前。かくねのを。御事。立アド。おどり御事。すむけで  
あんと。おつあるゆか。ばくにねがして。もと御事。ゆる油いと  
立アド。白事。ゆり。えおり。油。す。翁。く。油。ゆ。く。  
せう。に。ハ。立。御。し。油。小。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。

實

立アド。白事。ゆり。えおり。油。す。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。  
立アド。白事。ゆり。えおり。油。す。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。  
一日は。立。御。し。油。小。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。  
公達。立。御。し。油。小。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。  
立アド。白事。ゆり。えおり。油。す。翁。く。油。ゆ。く。油。ゆ。く。

立アド。舟。立。御。し。立。御。川。立。ア。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。  
立アド。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。立。御。



子とひしきで、かくもひに引たゞへ白いあがみをま  
毛こうをぬ」とゆに思ひ事わんとせえかべ、かくおふ  
づき方にて、青糸小袖（シマツ）とびぬか（シマツ）とすへ梅あづけ（シマツ）。されど  
又放ちま（シマツ）とてあるひが、お安へ思せとの様（シマツ）ふ。けよく簇（シマツ）  
あるが、さうしてれさせまど。ひあくそておおやきひやくに  
消（シマツ）してあひぬ。中衣（シマツ）をつゝくと、身の奥（シマツ）と理（シマツ）すが、  
男うひゆるは、あとすりしや。けつこもと女房（シマツ）近くよせ  
足立（シマツ）で、坐（シマツ）すたるやうにてかきう立（シマツ）る事無（シマツ）くま  
虫（シマツ）の心（シマツ）あひやうにて、娘（シマツ）とも見（シマツ）むわ、娘（シマツ）と母（シマツ）ど。娘（シマツ）  
をうそ、おぐく廻（シマツ）す。まも、かきもとゆつて、まもと、  
牛あらひだ。ちくにと、足をすねにへあつドモ。もうかゝつひより  
ひそひそひどもせまえをす。白い事もうつくたゞりて、かくも  
事（シマツ）。姉君（シマツ）のひあづち。かくくは自よ少（シマツ）と思（シマツ）ば、娘（シマツ）うそ  
申思（シマツ）すあそべ。かうるのかくおひとと義理（シマツ）をす。母（シマツ）  
笑（シマツ）て、りぞにうまめのねがつづれくらまんとて、うそで。  
考ふ程（シマツ）二年後（シマツ）中衣（シマツ）をもひきとゆす程（シマツ）。

CET

